



アイヌ語で「広場」の意味
 文 北原 次郎太 絵 小笠原 小夜



道内には、アイヌ語が基になった地名がたくさんあるよ。いくつ読めるかな。

- ① 稚内市声間
- ② 登別市千歳町の岡志別川
- ③ 深川市多度志の屈狩志内川

＝答えは紙面の下に

読んでみよう

アイヌ語には日本語にない音があります。これをカタカナで書くときには、字を小さくして表します。このページのタイトル「ミンタラ」の「ラ」もそうですね。小文字は全部で14種あります。毎回、そのいくつかの読み方をしょうかいします。

今回は「ム」です。例えば「カム」(肉)、「ハム」(葉)、「サム」(～のそば、近く)という単語などに使われます。

「カム」と言ってみましょう。「ム」の音を出す前に一度、くちびるが閉じます。ここで止めてくちびるを閉じたままにすると「ム」の発音になります。

「ム」の発音を動画でも学べます。出演は関根摩耶さん。指導は千葉大学の中川裕先生です。スマートフォンを持っている人は、QRコードから読みこんでください。



クイズの答え

- ① エヌハ(アイヌ語)・エヌハ(アイヌ語)・エヌハ(アイヌ語)
- ② おかへ(アイヌ語)・オ(アイヌ語)・カ(アイヌ語)・ウ(アイヌ語)
- ③ ン(アイヌ語)・カ(アイヌ語)・ウ(アイヌ語)・ナ(アイヌ語)
- ④ ン(アイヌ語)・カ(アイヌ語)・ウ(アイヌ語)・ナ(アイヌ語)
- ⑤ ン(アイヌ語)・カ(アイヌ語)・ウ(アイヌ語)・ナ(アイヌ語)
- ⑥ ン(アイヌ語)・カ(アイヌ語)・ウ(アイヌ語)・ナ(アイヌ語)
- ⑦ ン(アイヌ語)・カ(アイヌ語)・ウ(アイヌ語)・ナ(アイヌ語)
- ⑧ ン(アイヌ語)・カ(アイヌ語)・ウ(アイヌ語)・ナ(アイヌ語)
- ⑨ ン(アイヌ語)・カ(アイヌ語)・ウ(アイヌ語)・ナ(アイヌ語)
- ⑩ ン(アイヌ語)・カ(アイヌ語)・ウ(アイヌ語)・ナ(アイヌ語)

失人たちの物語 シンリッオルツペ

漁業や交易 宗谷のくらし伝承

アイヌ語名はハタンコイマツ。現在の稚内市、宗谷村第一清浜に移り住みました。1942年、10歳の村見えなくなり、その後病気がちではありましたが、明るく快活なフチ(おばあさん)で、84歳まで長生きしました。

ペンは、宗谷地方の昔の暮らしをよく知っていました。宗谷地方のアイヌ語の話し手であるペンは、日本語も流ちょう。表現力がとても豊かで、地域の人や学者にいろいろなことを教えました。ペンが語りのこした宗谷アイヌの伝承を、いくつかしょうかいしましょう。

海に面した宗谷のへらしでは漁業が大切な仕事です。アザラシやトドなどの海獣もよくとられました。秋には「雁」という鳥が枝幸の方向から飛んできます。そのとき「弓のような形に並んでくると、その年はサケがたくさんとれる」「バラバラに飛んでくると、あまりとれない」と言われていました。

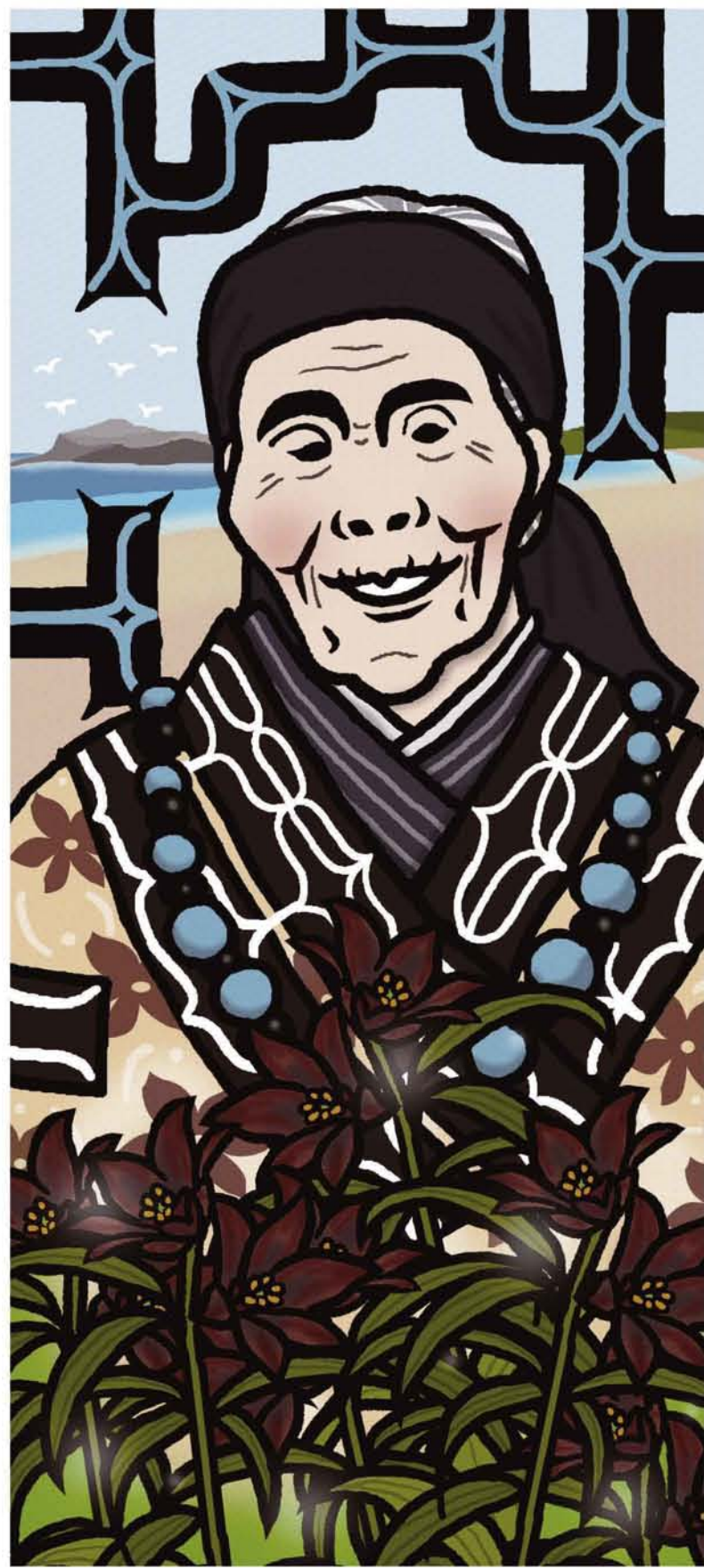
冬に流水がくると、アザラシやトドもやってくる。海獣をとりに行くときは、家の中で相談してはいけません。いろいろな火の神様が、人間が狩りにいくことを沖の神様たちに教えてしまうので、出発前はおいのりもしません。狩りが終わってからおいのりします。

宗谷は樺太(サハリン)に近く、樺太アイヌとの付き合いや交易も昔から盛んでした。明治時代の初めに、樺太アイヌの半数近くが札幌のそばに移り住んだことがありました。その後も移住した人々がたびたび宗谷まで来て交易をしたそうです。1900年ごろには、例えば「セマ マトツハレ」という手皮製手袋なら、うみぬりのさかきとかわわんを1個ずつ出せば交換できたといわれています。

ペンは「樺太のアイヌ語は宗谷の言葉とは発音が少しちがうが、分かる」と話していました。自分が語りのこしたければ、宗谷のアイヌ語は消えてしまうという強い思いで、最晩年まで語り出すように記し続けたといわれています。

ペンの覚えていた多くのアイヌ語は「アイヌ語方言辞典」という本に収録されています。(敬称略)

かしわぎ 柏木 ベン (1879～1963年)



宗谷でのくらしには漁業が大切。雁が弓なりに並んで飛んでくると、サケがたくさんとれる前ふれ

大沼にいた主(大きなアカエイ)。昔、ききんで人々が困った時、主がかび上がり、自分の体の一部を食べて助けた

柏木フチが語りのこした宗谷のくらし。たくさんの伝承がある

オンコロマイ川にカムイワッカ(神の水)がわくところがある。重病人が出たとき、ここに刀のつばをささげ、その水を飲ませると治るとい

「ポイスマイエクルがポノキキリマと船に乗り、トドをとりに行く」という昔話も

宗谷アイヌと樺太アイヌは交流が多かったため、言葉もよく似ている

宗谷では天気がいい日、樺太が見えます。1875年に国境が引かれるまで、アイヌ民族は自由に海をわたっていました。江戸時代の後半、和人が来て漁業を始めました。和人もアイヌ語を身に付けてくわらしていたようで、樺太アイヌと宗谷の和人が、アイヌ語で手紙をやり取りすることもありました。

ペンが語りのこした歌には「アイヌと和人が氷の上に海獣を狩りに行って遭難してしまつた。アイヌの神様にも和人の神様にも、いっしょになっておいのりをして、どうかこうにか助かった」というできごとを歌ったものがあります。宗谷で語られてきた物語には、サマイエクルという神様が活躍する話がたくさんあります。

ポイスマイエクルがポノキキリマとトド狩りに出かけた。もりを打ちこんだが、トドは七日七晩、船を引きまわし、ポノキキリマはつかれて、死んだようになった。

ポイスマイエクルは仕方なく、つなを切りながら、「このもりはノリノキで、つなはイラクサでできている。もりの柄はシウリザクラだ。それらがしげって動けなくなり、波打ち際でくさって小島になるだろう。そこにイラクサや木をとりくる人間たちが小便をして、お前はそれをかけられるのだ」と言った。

トドは「たかが人間が」とばかりにしていたが、本当にその通りになった。

神様が活躍 物語たくさん